

松延古杖揃講釈

全

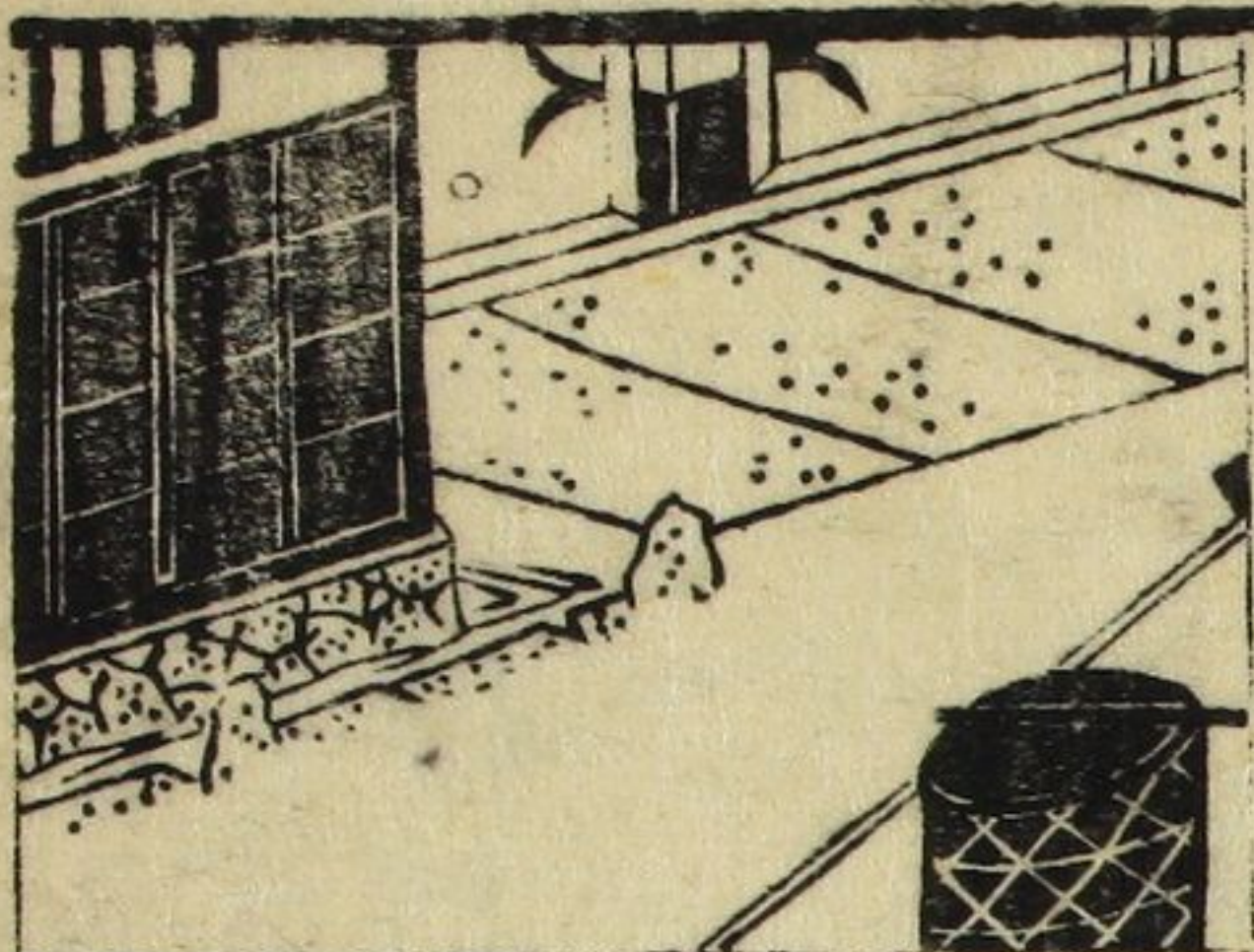


松延 合状楯 繪杵



本文句解

永京元年乙酉
 人皇百五代後新
 院の法皇今川俊
 頼名保与右貞世
 と号し八幡太郎の



今川俊頼名保

仲秋制國傳

不知交道の武乃統

多乃捕利事

好松彦道運心養





人の心は我れ治るは
 三代の御子息人
 神の書之御心
 のと我れ心
 自心内新
 るどの我れ心

書之世を書の事
 生身の持ホのこと
 書より成ふ上
 分限おぼし
 つけらるる
 物をつら
 善く生物を
 成ゆるしむ
 小神の
 かのと
 べら
 大なる
 ま
 づ
 申す
 余

樂教生事

小之軍不遂

今仍死罪事

天种

沙汰致

今氏

極業

生

破壊

一

大猷之氏をすめ
神の社地をす
してすめを
ひて自かのを
み成をいす
先征山莊の代
素家屋を
成つゆ我屋
ふつる公君父
父あり重徳
さ君あり
主人に
公勢を君
つしめ私用
自分んの用
貴爵より

取とて
臣下の働
の君
と礼
礼を
人の
と
に
我
か
へ
北
富
は
酒
花

一 獯忠孝事

一 種公勢重私道忠

一 天道働事

一 不辨臣下君忠

一 賞罰事

一 我知臣下働君

一 可為國君事

一 全君礼を後忠臣

一 樂身事

一 不知身を限或事



一 此の事は一玉二玉に
 くりしは後世の世に
 政乃玉の仕立
 四出五張の世の流
 あり。家世の世の
 の流
 一 於此の世の世
 一 初より世の世
 一 乃の世の世
 一 人といふ世の世
 一 世の世の世
 一 方角といふ世の世

他人事

一人来則掃塵病纏

対面事

一 好獨味不能絶人々

一 隠居事

一 武具衣は装束の世の世

一 下見是若事

一 一家は乃の世の世

一 正孔義事

一 貴賤不辨國事乃理

ありてはもの家
 春ハ中久ささ
 意ハ心のはおこ
 ころせりて
 家ハてハ水を合
 ろりては獲るもの
 水ハのすのり
 困目と云は時
 林井さう困
 支那て成り
 ありては
 倭人さあ
 新紙君心と
 名のあて
 ひ



古本

伝本楽事

於分國多諸國

遊旅人車

在傳為心誠為衆

寄其武至遊不城

在傳為心誠為衆

寄其武至遊不城

在傳為心誠為衆

寄其武至遊不城

在傳為心誠為衆

三六

五

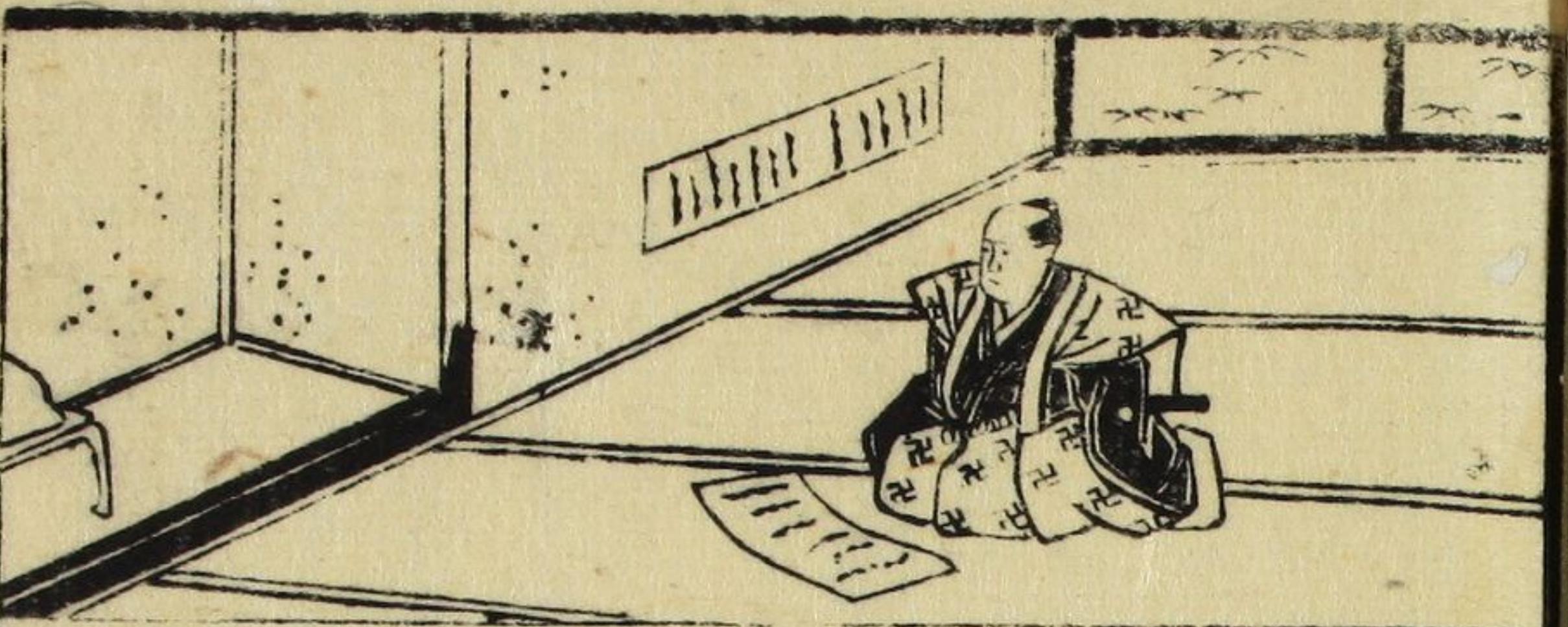
乞く信人
 弁根の表向の役を
 勤る人

海山城を建てて
 知行あどそい人

彼方のそよふ代々
 付志こころある人

大い付をえぬいれ
 老とめてほしむ人

批判をせむうせん
 くらうむらう・仏の釈
 尊とこませえ・衣まの
 世あるものゆゑある



せん せん せん せん せん せん せん せん

生半根の心算をせむる人

未則の心算をせむる人

策財の心算をせむる人

和成市販の心算をせむる人

和成市販の心算をせむる人

略々軍部中時款張族帯

披懸肩有る心算をせむる人

分別の心算をせむる人

夜更の心算をせむる人

月並の心算をせむる人

不どのりのあり
 ・後ハまぢら西きん
 ・知もユま子さまり
 ・候ハいのりぬまり
 ・必要ありのりえん
 ・よりこのこまり
 ・安益働ハかまり
 ・ぬ正してまじと選ハ
 ・武士及ふまはまり
 ・振込ハ新義さまり
 ・しとのこまり
 ・兵士六軍共あり
 ・發出とい自まの

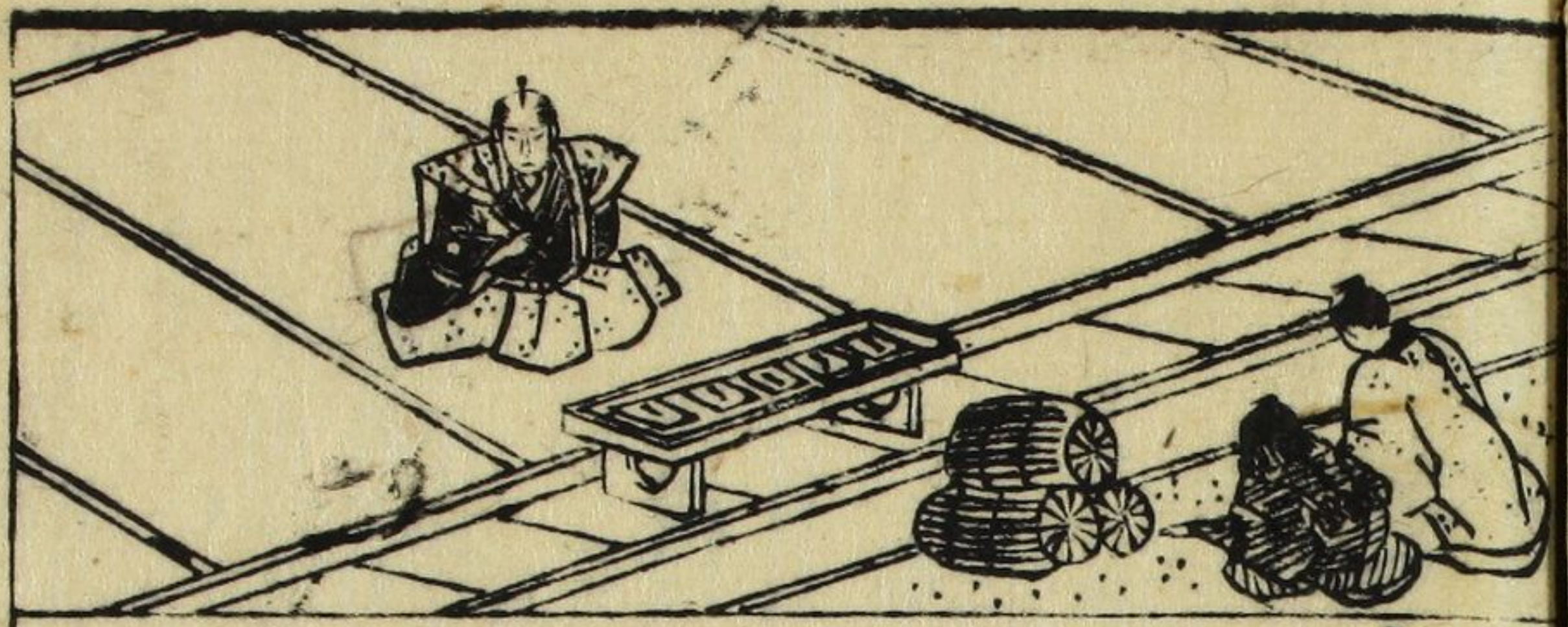
居るむどのの發ふ
 張るままり
 今川仲秋父の發
 列成うけてけり
 を思ふ張るままり
 一とまり
 ・初巻いとの始て師の
 ・更なるあり
 ・古ハ物と懐懐く
 ・師と取ふハむままり
 ・むまらせしまり
 ・發列まかり
 ・よりふまり
 ・大ていあむままり
 ・美るままり

振るはるる海に波余るる夜
 上為装束清遠な徳命
 百使の法儀は新義ままり
 油の則未とままり
 三多の儀供お救元生の儀

如演諸法輝光とままり
 道法國志仁義礼智信國光
 道法新義とままり
 弘法則とままり
 道法科身とままり

三行

一のふみあまー
 児童ハ十二歳より
 下成り
 裁場ハ太刀くま
 武具ハ太刀くま
 ろひかごと弓矢炮
 まて武士のこも
 具といふ
 卓机あまの座と
 四ツ足ありつこ
 目かふてニツあ
 みのまて・城麻の
 まるとして赤色麻の
 ころいろひま
 名義公のすれ



貴冑其考要也益勤操私
 用弓馬道不為習不扶持
 人数家室仍不從於諸
 家人後親知公防相遠
 時後人持據威勢多矣

亦既生可知我乃家徒不
 不持其不無天不物儀備可
 惜次弟也仍給書書如件
 永享元年九月十六日
 神登山守為教刻書

古大前

十

未代の世のその
 少人少事少人
 我こそしてのよかり
 は教訓のあてきり
 孝文に限りのいふ
 あらゆる世に小児
 の世なり
 腹城の相及後念
 小の我れ本家成
 云は後家成父子を
 何事下りし小大
 臣加父子の清臣
 とは獨裁の清臣
 世に上りて毎世
 考しては世をわく
 らしむるなり

主類のそのその
 ありむるなり
 代古の代古の代古
 物の代古の代古
 代の代古の代古
 初室の天子の
 こののそのその
 右業のそのその
 ありむるなり
 虎にそのその
 ありむるなり
 ありむるなり
 ありむるなり
 ありむるなり
 ありむるなり

三村不陸師全志親保練
 三田重忠不陸師全志親保練
 室室室室室室室室室室
 毎世世世世世世世世世
 而後乃能修者得女の歌

陣代士に陸病全志親保練
 傷者其志得乃回能通能
 官且其志得乃回能通能
 不持其志得乃回能通能
 若松間全志親保練

付さるなり
 狩廻経法は好む
 乃の不問他取り
 ・元服古氏百世
 ・の我経世と母の
 時をふしや〜と
 者もたれしなり
 一〜あり
 ・香茶ハ〜あり
 ・純粋〜の時〜
 ・進付〜あり
 ・自合〜あり
 ・若〜あり



又世業園而感る世業
 在る父の志其証悲縁人
 中披君之悲秋何事重奪
 引事却快治以懐義我經更
 可社發膏也每不経後時家

古願教所負者統花母
 懐中遠越去和園言多秋徳
 牧不可見村不経者堵之思
 常變治治余系秋経其種
 汝名諸園と流約在之如流

一六六前

十六

後ろの御子なり
 七命の命を知ら
 海にわたりて
 海のおりて
 糸親のわたり
 眼にされたり
 亡魂の父義なり
 尊懐のいささ
 補佐の友佐なり
 牛玉の神も極ひ
 仰りあるとめ
 冥乃のいささ

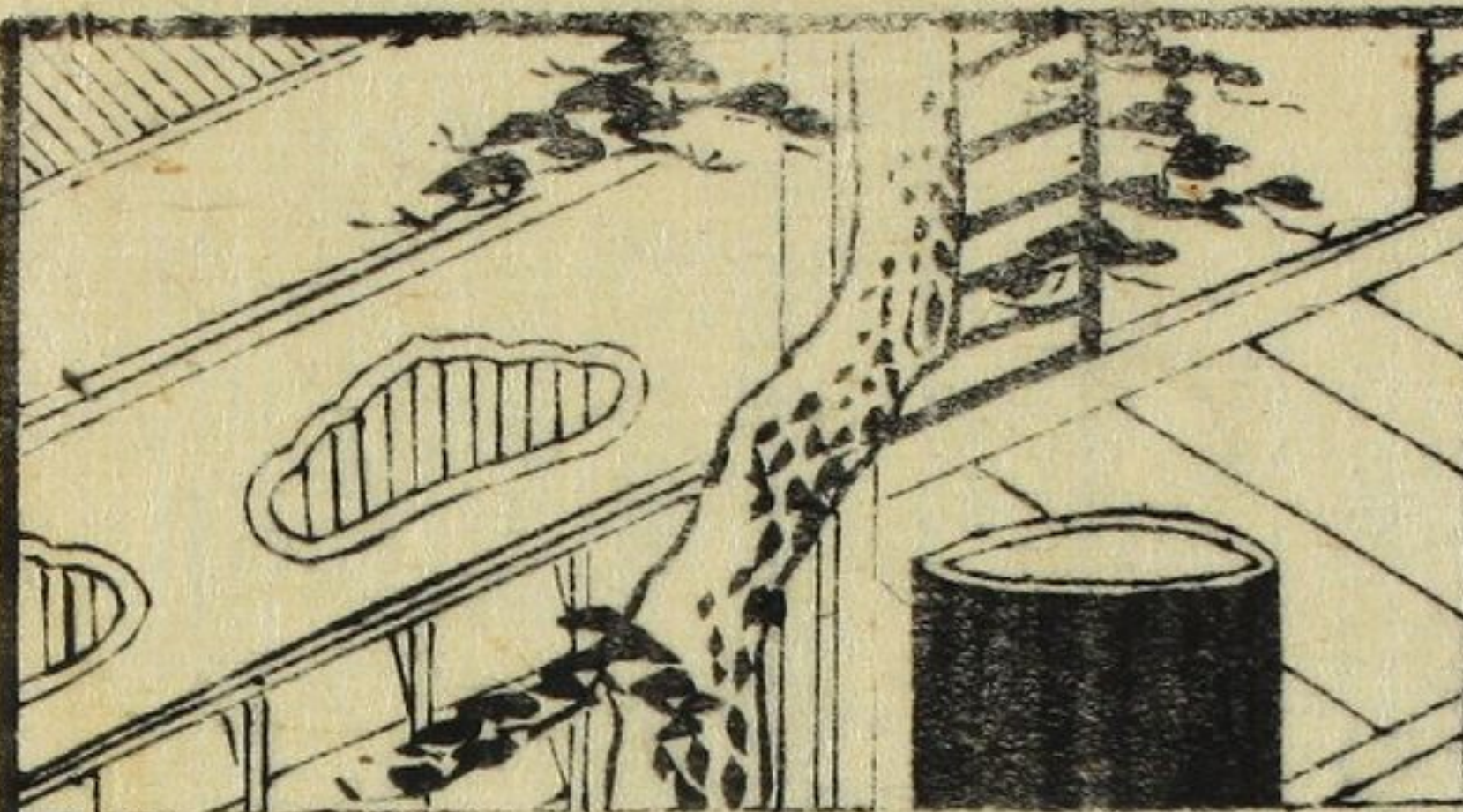
新より 神の御子
 生れり
 起法文者今の
 うりなり
 廣太のいささ
 秘中取致をわ
 倭のいささ
 芳光のいささ
 狭長の余意
 八のいささ
 あるなり
 慈貞のいささ
 かくるなり

身初まき遠國に服はさ
 姓花を慶忍純熱なる
 員平家使へて
 我本曾義行後美傾
 時我表石兼後馬
 敵本曾義行後美傾
 員平家使へて
 我本曾義行後美傾
 時我表石兼後馬

亡者我の海に
 不補沈る海に
 之肥加の海に
 之倭奴の海に
 望来刺義輝補

五十六前

八定ハ一字入り
 七城志世むり
 産録ハ一切の義
 理成さるとは



眼方端後部之筆紙後部

文法軍国守日 義經

進上源衣長衛佐殿

西塔云藏坊辨文

最期書拾之一通

抑養集時家身靈別新測

山後堂形心来首夜能城

改峰之字说新刺除餐餐

比海向志多不後志將格

密秘法及定出律床儀卷

五女新

三十一

運播八軍...
 新中...
 支成...
 後者...
 親了...
 此の...

富類...
 此と...
 運播...

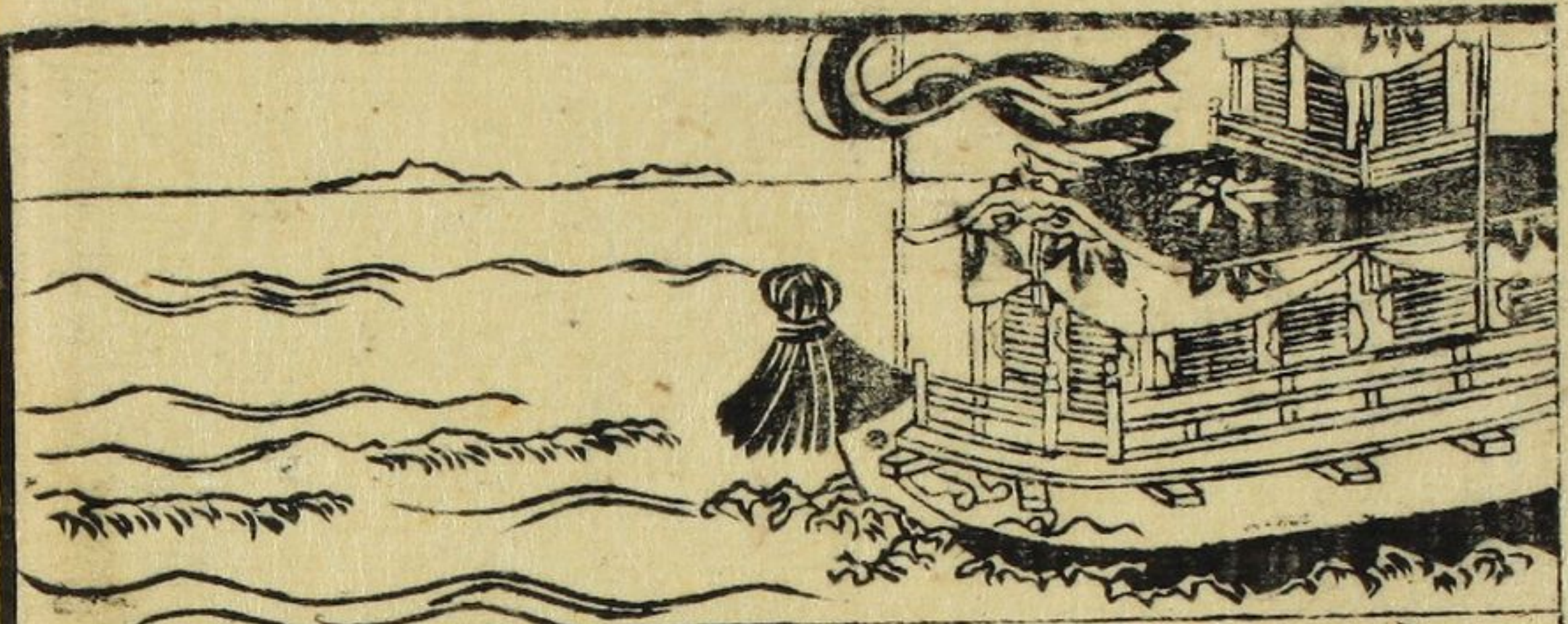


不...
 敏...
 教...
 肯...
 右...

竊...
 八...
 鈔...
 名...
 列...

五六前

三十一



身は世に生れしは流るる如く
 因事起るは風便は身を養ふ
 深谷の淵に坐して静かに
 息を吐きしは自然に
 則ち此世に生れしは流るる如く

かにんともるるに
 にくものかきふ
 あまそひげ
 け君との敷敷
 御命残るは
 ちあつて首くこの
 身よ
 害い命を
 生死のいのち
 いふぬいふ
 小き
 順縁のあつて
 つる縁も

肝心誠敬増し
 二度か海を走るも
 夫もまた我らも
 風塵は我が
 深谷の淵に坐して

其の吹録の形跡
 彼をいふあり
 舟泊の垂まゝ
 のまゝ
 のが平肉た束の
 ひでさこのまゝ
 あらびのわのま
 垣登のまゝ
 十代の末びせん
 ち老登のまゝ
 入の清登のまゝ
 正三位院をま門
 口院とまゝ
 送物いふまゝ

かのみん
 花海の花の形
 波上の船みのり
 幾場いふまゝ
 生者心減ハ生
 ののめりまゝ
 横七のまゝ
 老少不定ま
 ろのまゝ
 われまゝ
 先母の賛約
 のまゝの定
 意の権化
 も法親の
 して法身ハ大

古抄

身兼海を海を砂
 退行報を方端
 那に筆紙
 秀承三年正月
 熊谷次郎殿

大坂快

今度為行相中
 変者因心
 誠用
 程有下知
 由次
 痛
 働
 運
 心



七世

四十三

其後以事屬後園事不稱時日

池上澤別美咲人戰切勝陣

園和堂近排諸軍勢平

沈加生捕石田沼沼軍南

渡第功事今排如奪軍刻

報身ハ討死

其後未終身

あつりりの

そのこと

つをり

ハ去

我の志

可討事屬人園報事

縁者有る助今事

全報報事端

車報張城

改む

あはせてあるん
 ・言はれはわらうん
 ・必定はまらうん
 まうん
 ・你天をまらうん
 ひあんのん
 ・感應六仙林の
 こと
 ・肉あんのん
 せん
 ・感海はんと
 あん
 ・僧心と六仙林の
 ことひありあうん

まわりのこと
 ・相法とて死
 して又生する
 こと
 ・まうん
 ・二門風葉とて
 赤の二つ風
 こと
 ・虎碧とて
 赤の二つ
 こと
 ・死が
 こと

時踏落秀形刻首事不可

上師信也と傳す

慶長十九年

大野玄馬殿

同返状

芳墨と投書は後
 下

形と御形事
 下

父大周秀形及
 下

相度と首目
 下

親法文と事
 下

長考

四十五



先年石田流筋補身安
 覺後天采運元正
 令其次用其真價割
 較運之根原知少知割
 心裁併者裏之試來云

和漢西のこ
 我於ん
 小態後款
 以於於死御
 我わん
 其君の
 須弥山の
 解於其色の
 の根乃於の秋
 小の美小南の

大國志者秀乃於宛約
 國威統今又對事全不及
 是悲一國一城乃法日其勝切
 事乃其乃乃乃乃乃乃乃
 天造之正理仙神三寶之納安

東の白面紅の藤色
 の山毛の鳥取定法
 小遣りうりしり
 ありんか有べし
 刑といわゆる
 心さきの最末
 来ハ後の世あり
 ・永く来末永
 とい君忘し
 とん
 ・非のそハハ文
 のどくわりの
 ことあり

車にそ彼赤子に
 也程巧一戦節
 慶長九年 秀頼
 曾我快
 今月廿日釈於富士野

為我軍のりよ依
 て提系京時為我
 祐任一の快
 遠久四年癸丑五月
 十六日新給々後
 富士のふ巻うり
 日中の大小名十
 万の勢者後家
 姓陣あり内共日
 何津三年結の男
 勇我十郎祐成世
 同の弟時守世
 筒子の足形入
 入七文のうり

物場陣勇我十郎祐成
 同の弟時守世
 何津聖陣佐五郎佐人
 工者丸忠の尉祐経佐方
 佐人佐佐文五郎佐家

と付は時... 者... 流... 九... 小... 心... 石...

内... 事... 穿... 我... 止... 我... 巧... 社... 以...

三... 弘... 小... 心... 石...

建久四年 八月 晦日
曾我左兵衛殿
同返状
去海月... 教書... 今月... 旨

時宗と生よりて
新田の建小別
を推教付の者
たつたふら工者
に津のあり大
わきん後忠公
出で物持に年を
前承永次の忠行
工者勝ル武重承永
次の忠行忠行
九世の孫孫あり
房師の次次男
伊波次年入る承
と云無故に孫孫

別來謙弱見仕は徳作
小次郎せん房むらめ忠永
次郎しん京都きょうと后ご任にん由
水及は各別すゐ使し嘉
兵へい禪ぜん師し房ぼう流りゅう人にん全ぜん不ふ

徳新を付とらじ
むは時祐藏二万九
として又時宗
のとれよ祐宗
勇我を弟祐伝
不嫁よめ子息こしの
赤江あかえ貴たかつつ忠
勇我を成とけは時
新田のいよと人
右を弟助成とや
の足牙祐禪しん付
と教年しん教し
後よ中ちゆうのを

知し乃の方は以い右みぎ及およ左ひだりを
むは名能な之のあり中ちゆう以い
六月ろくがつ五日ごにち
勇我むげを弟てい

進上

世に
 徳も徳も
 と神も我も
 徳も我も
 漸くは
 自ら
 人たり
 解り
 小
 二
 ざ
 一
 見

梶原東三殿

正号教白

紀後冬事

上棟天帝新に大天

嫡魔法主の道冥友恭

伝病
 子
 房
 是
 廿
 狐
 秋
 の
 小
 伊
 九
 我

山府系下奥地
 天照皇太神宮
 箱根富士渡
 所合峰山
 祇園

才子と号したるが
 為我兄弟伏誅の
 後徳念より後徳
 念と号すこと其
 自賞しし事と
 終りざるを降
 徳念に引其天を
 以て徳念の行を
 重くしめ其年
 十八才ありて徳念
 誅せられし其後
 の法師之徳念を
 浄念と稱はせし
 る也

九帝王の命を徳
 念有法皇仙御
 に院宮親王と
 小舎有乃等の作
 を徳念は故去とい
 為我兄弟伊豆の
 知小舎人三言初来
 於此言其意之極
 別後ふと云に同
 小舎有乃は年男と
 く号せり一旦祥
 房の成務守を
 勳子と稱せし其
 勳の承ありし人
 也行ありし事
 ありし事あり

七
 松尾奉聖惣日平國
 小神祇直徳經官道殊
 氏神金比呂河上
 此夏徳在毫其松言
 尚法符来世彼空飛
 五十

鼻志也仍記法文如件

文治元年

九月 日

正尊

東京書肆

人形町通松島町

伊勢屋庄之助板

新田富一